

山神

山彦

き、里を行事霧のごとく、嵐のごとし、その通り行所々如斯のよしと云々、人物を慎むべし、數十年にたまくあると、岩城の邊定めて山近き所なるべしといへり、

〔倭名類聚抄二神靈〕山神 内典云山神、和名夜萬乃加美日本紀云山祇、

○山神ノ事ハ、神祇部神祇總載篇ニアリ、

〔伊呂波字類抄地儀〕山孫ヤマヒコ

〔運動色葉集屋〕山彦木玉ノ事也

〔倭訓栞前編三十四〕やまびこ 菅家萬葉に山彦と見ゆ、もと山靈をいふ也、新撰字鏡に鶴をよめるは心得がたし、萬葉集に山響をよめり、ひこはひゞきの急語也、或は桜リヤウをよめり、谷中響と注せり、俗にこたまといへり、新六帖に、

世中にむなしき谷のひゞくをばたれ山びこと名づけそめけん、新撰字鏡に龍膽を山びことよめり、

〔類聚名物考地理十四〕山彦 やまびこ 谷響

山彦は山神の名なり、海神を海童海若などいふが如し、それより轉りて、山谷の間にて物の聲に應へて響の有るをも山彦といへり、

〔詞花和歌集二〕だいしらす

山彦のこたふる山の郭公ひとこゑなけばふたこゑぞきく  
〔倭訓栞中編二十七〕やまびめ 山姫の義、山彦に對へていへり、

〔源氏物語四十七〕秋のけしきも赤らずがほに、あをき枝のかたえはいとこく紅葉したるを、  
おなじえをわきてそめける山ひめにいづれかふかき色ととはゞや、さばかりうらみつるけしきもなく、ことずくなにことそぎて、をしつ、み給へるを、そこはかとなくもてなして、やみな

能因法師

山姫